

# ジグソー法を用いたフォークダンスの授業について

Folk Dance Class using Jigsaw Method in Junior High School Health and  
Physical Education

増 山 尚 美

MASHIYAMA Naomi

北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要  
第12号 2021

# ジグソー法を用いたフォークダンスの授業について

## Folk Dance Class using Jigsaw Method in Junior High School Health and Physical Education

増 山 尚 美  
MASHIYAMA Naomi

### I. はじめに

平成30年度改訂学習指導要領では、既存の知識や技能を獲得させるだけでは変化の大きいこれからの社会に対応できないことから、知識・技能・情報を活用し、様々な人と共同して問題解決にあたる能力を重視している。それに伴い、「主体的、対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が求められている。

フォークダンスは、中学校・高等学校における「ダンス」の内容として、創作ダンス、現代的なリズムのダンスと並び位置付けられている。「ダンス」の領域では、創作ダンスを中心に問題解決学習が実践されてきた。一方でフォークダンスは授業での実施率が低いことに加えて、主体的な学習としての実施や指導方法の検討も遅れている。中学校、高等学校におけるダンスの内容のうち、他の2つの内容と比較して内容や指導方法についての研究や報告が少なく、教材としての意義や効果について十分検討されてきたとは言い難い。

### II. 目的

本研究は、中学校保健体育におけるフォークダンスの実施状況と教材としての意義を整理し、今後の在り方について考察することを目的とした。

さらに主体的な学びを促す授業方法として、ジグソー法を用いた実践について報告する。

### III. 結果

#### 1. 中学校におけるフォークダンスの実施状況

高橋ら(2015)により2015年に実施された調査<sup>1)</sup>では、「現代的なリズムのダンス」81.7%、「創作ダンス」61.7%、「フォークダンス」48.4%の実施率であった。中村ら(2007)は、フォークダンスは体育祭の集団演技として「ソーラン節」等の実施が見受けられる以外は、極めて低い実施率であったと報告している<sup>2)</sup>。

白波瀬(2018)は、フォークダンスの実施率と実践報告が他の2つのダンスより少ないことを報告している。フォークダンスを扱う

場合でも体育祭での発表の練習に授業が置き換えられる弊害がある，長い時間をかけて1曲だけを練習する，見せるためにアレンジし「伝承されてきた踊りの特徴を踏まえて踊る」という学習内容に触れられない，他の種類のダンスの学習時間も奪うことになることを指摘している<sup>3)</sup>。

渡辺（2015）は「フォークダンス」を単元として計画している学校が少ない理由として，次の3点を挙げている<sup>4)</sup>。

- ・ステップや型を習得する過程において，楽しさを味わわせることが難しい
- ・児童生徒が自ら考え創意工夫する場面が少ない
- ・教師が教材研究に時間がかかる

なお，運動会等の集団演技として全国の学校で実施されている「ソーラン節」は，1988年に伊藤多喜雄が民謡をロック調にして発表し，のちに「TAKIOのソーラン節（南中ソーラン節）」とタイトルが変更された曲に，稚内南中学校で振付された踊りがもともになっていると考えられ，北海道伝承の民謡そのものではない。

## 2. フォークダンスの内容

学習指導要領解説<sup>5)</sup>—平成29（2017）年度 第1学年及び第2学年—では，ダンスの「知識及び技能」として次のように記載されている。『次の運動について，感じを込めて踊ったりみんなで踊ったりする楽しさや喜びを味わい，ダンスの特性や由来，表現の仕方，その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに，イメージを捉えた表現や踊りを通じた交流をすること。（中略）フォークダンスでは，日本の民踊や外国の踊りから，それらの踊り方の特徴を捉え，音楽に合わせて特徴的なステップや動きで踊ること』。平成29年度の中学校学習指導要領解説で例示されたフォークダンスは表1のとおりである。

平成10年度学習指導要領解説の例示では，地域や踊りの特徴を考慮し，小学校から高等学校まで難易度や発達特性を踏まえた系統的な学習となるように編成されている（表2）。平成20年度以降，中学校第1学年及び第2学年において男女ともに「ダンス」が必修になった。しかし扱う内容は創作ダンス，フォークダンス，現代的なリズムのダンスから選択

表1 踊りと動きの例示 中学校学習指導要領解説—平成29（2017）年度

	1学年及び第2学年	第3学年・高等学校入学年次
日本の民踊	花笠音頭 キンニャモニニャ げんげんばらばら 鹿児島おはら節	よさこい鳴子踊り 越中おわら節 こまづくり唄 大漁唄い込み
外国のフォークダンス	オクラホマ・ミクサー（アメリカ） ドードレブスカ・ポルカ（旧チェコスロバキア） リトルマン・フィックス（デンマーク） バージニア・リール（アメリカ）	ヒンキー・ディンキー・パーリー・ブー（アメリカ） ハーモニカ（イスラエス） オスローワルツ（イギリス） ラ・クカラーチャ（メキシコ）

〔高等学校 その次の年次以降〕

日本の民踊 佐渡おけさ，さんさ踊り

外国のフォークダンス

速いリズムに合わせた踊り，アクセントのはっきりしたリズムに合わせた踊り，オープンサークルの踊り，カップルダンス

できることになっており、それぞれの内容が学校種をまたぎ系統的な指導となっているとは言えない状況である。つまり、小中高を通じてフォークダンスに全く触れない可能性もある。

## 2. フォークダンスの取り扱いに対する指摘 (1) 伝承と定型

なぜ多種多様なダンスの中で、学校教育において創作ダンス、フォークダンス、現代的なリズムのダンスの「3つのダンス」を行うのか。「表現運動及びダンス指導の手引き」<sup>6)</sup>では、フォークダンスについて次のように説明している。「世界各国・各地域で自然発生し、伝承されてきた地域固有のダンスであり、決まった様式や動きには国や地域の風土や文化が反映されています」。フォークダンスは創作ダンス、現代的なリズムのダンスと異なり

伝承されてきた文化で定型の踊りである点が特徴である。伝承と自国の文化や異文化理解、踊りを通じた交流を目的としている。

しかし、現在フォークダンスとして例示されている踊りは、必ずしも自然発生し、その地域で伝承されているわけではない。アメリカでは、ヨーロッパの一地域にルーツを持つ踊りが20世紀初頭のレクリエーション運動により活発になり、当時流行した曲に合わせて再構成されている。

日本の「民踊」も、昭和時代に経済的発展や地域振興を目的に作られたものが少なくない。宗教や生活と密接な共同体の行事であった盆踊りも、観光化によって本来の趣旨は失われ、ショーアップされた形態で存続しているものもある。

高知市の「よさこい祭り」から派生した鳴子踊りは定型を持たず、200以上の地域に広

表2 ダンス系（フォークダンス）の内容の体系化 平成10年度学習指導要領から抜粋

学校種	発達の段階		領域 (領域の内容)	内容
小学校	各種の運動の基礎を培う時期	第1学年・第2学年	表現リズム遊び (リズム遊び)	リズム遊びでは、軽快なリズムに乗って踊ること
		第3学年・第4学年		(注1)
	多くの領域の学習を経験する時期	第5学年・第6学年	表現運(フォークダンス)	フォークダンスでは、踊りの特徴をとらえ、音楽に合わせて <u>簡単な</u> ステップや動きで踊ること
中学校	卒業後に少なくとも一つの運動やスポーツを継続することができるようにする時期	第1学年・第2学年	ダンス(フォークダンス)	フォークダンスでは、踊りの特徴をとらえ、音楽に合わせて <u>特徴的な</u> ステップや動きで踊ること
		第3学年		フォークダンスでは、踊りの特徴をとらえ、音楽に合わせて特徴的なステップや動きと <u>組み方</u> で踊ること
高等学校	入学年次			
	その次の年次以降		フォークダンスでは、踊りの特徴を強調して、音楽に合わせて多様なステップや動きと組み方仲間と対応して踊ること	

\*下線 筆者記入

(注1) 小学校第3・4学年では内容の「F表現運動」について、「フォークダンス」を地域や学校の実態に応じて加えて指導できることが示されている。

がりを見せている。地域にルーツを持たないことで、かえって各地で踊られるようになった。鳴子踊りから派生した一つであるYOSAKOIソーラン祭りでの踊りは、定型を持たず、チームごとに振り付けられた踊りを集団で踊ることが特徴である。開始から27年経過し、20歳代、30歳代の人には、物心がつく前から地域の踊りとして存在する。「南中ソーラン」のように、地域ではなく学校という共同体で生まれ、ドラマで取り上げられたことで認知度が上がり、全国的に踊られるようになった踊りがある。25年以上を経て「伝承」され、日本を代表する「和風の踊り」のイメージが定着している。伝承の踊りか、ダンスの3つの内容に含まれない「その他の踊り」とするかは、意見が分かれるところであろう。

フォークダンスや民踊は人々を結び付け、集団に一体感をもたらす。その効果に目を向けると、伝承の過程で変容しているとは言え、特徴のあるリズムや動きを含んでおり、異文化を運動によって体験することには意義があるといえる。近年は過疎化や少子高齢化が進み、地域に根付いた民俗芸能や盆踊りのような祭りは、担い手不足で衰退し、消滅していくものもある。学校で教材として扱うことで、次世代に伝承し保存を担う可能性がある。

## (2) 踊りの選択

これまで学習指導要領解説に例示されてきた外国のフォークダンスは地域に偏りがある。より身近なアジアの国々や、日本にあまり紹介される機会のなかったアフリカの踊りは取り上げられてこなかった。踊りの選択にあたり、明治期以降、また第二次大戦後の導

入時期の欧米偏重が指摘されている。現在では、日本に居住する外国籍の人口は増加している。オリンピック・パラリンピック等の国際的行事で、全く知らなかった国や地域との接点が生じることもある。2019年ラグビーワールドカップ開催によりホストタウンとなった地域の小学校で、参加国ニュージーランドのハカを練習して選手と交流した活動などは、良い例であろう。現在は、インターネットの普及により、YouTube等で各地のダンスが映像で見られるようになった。様々な国の文化を知る機会は格段に広がっている。ICTの活用により、学びの広がりが期待できる。

一方で、中本(1999)は「“民舞”や太鼓がビデオテープの普及によって、実に安易に、しかも元の姿とはまるで異なるものへと変容させられていくことの怖さ」<sup>7)</sup>を懸念した。二次元的媒体では伝えられないものがあることを忘れてはならない。

また、様々な地域のフォークダンスを取り上げることは異文化理解につながり、地域の文化伝承として有意義であるが、踊りを教材化するには教員の負担が大きい。発達段階や技能の特性を踏まえた教材を広く検討することで、学校現場での選択と普及の手助けになると考えられる。

## (3) 生涯学習

アメリカでの調査で、身体活動を伴う趣味のうち、軽度認知障害の予防に効果が見られたのはスクエアダンスであったという研究報告もある<sup>8)</sup>。関連して高まる体力や生涯スポーツとしての効果も期待できる。

地域が抱える課題には、地域の活性化、孤立する人へのかかわり、異なる信条を持つ人

との共生，高齢社会と健康寿命の延長，等がある。覚えたフォークダンスを活用し「総合的な学習」と連携させ，地域課題を踏まえた発表の仕方を主体的に考える学習も考えられる。生徒自身が授業での学びを活用し，深めることが期待できる。

#### (4) 学習形態

フォークダンスの指導では，教師が一斉指導で教える，映像を見て踊りを覚えるなどの方法が一般的だ。「定形のステップを学習するには教授型の一斉指導が有効だが，グループで踊り方の背景を調べたり互いに教え合ったりする課題解決型の学習を組み合わせると，より一層踊りを味わいながら深めていけるでしょう」<sup>9)</sup> というようにグループ学習との併用も提案されている。教えることを通して自分が理解できているか再確認することができ，知識や技能の定着を促す効果がある。しかし，互いに教え合う場面では，技能の習得に時間がかかる生徒は，教えられる側に固定されやすい

### 3. ジグソー法を用いたフォークダンスの授業報告

#### (1) ジグソー法 (Jigsaw Method)

ジグソー法は，学習者同士の協力や教え合いを促進し，それを通して学びを得るという協調学習という学習方法に基づく方法であり，グループ活動を支援する方法から発展した。アメリカの社会心理学者であり，カリフォルニア大学サンタ・クルーズ校の名誉教授でもあるエリオット・アロンソン (Elliot Aronson, 1997) によって考案された。白人と黒人の子供が，教育レベルに差があってもお

互いが協力しなければならない学習方法を作ること，人種統合の課題を解決できると考え開発したと言われている。

ジグソー法の特徴として，栗田ら<sup>10)</sup> は以下のことを挙げている。

- ①学習場面において，一人一人に責任感を持たせます。
- ②基本的なコミュニケーションのトレーニングになる方法です。
- ③課題設定によっては一人ひとり意見が違ふということを許容する姿勢を育みま

#### (2) ジグソー法を用いたねらい

主体的，対話的な学習方法として，ジグソー法を用いたグループ活動と，解説書を読み解く方法を実践した。ジグソー法を用いたねらいとして，以下のことを意識した。

- ①教えあう関係性が能力の差を超え平等になる機会を設定する
  - ②伝えるためには運動を習得し，言語化する必要が生じ，知識・技能の定着と表現する機会が得られる
  - ③集団による試行錯誤を通して，効率的な進め方を模索したり，協力したりリーダーシップをとるなどの態度が求められる
- 解説書を読み解くことは，運動を説明するために動作分析の視点を持つことや，運動を言語化して伝えるための共通言語を理解するために有効であると考えた。

#### (3) 実施方法

事前に，ジグソーパズルのように，部品として組み合わせると全体像や内容が理解できたり，課題に多角的に取り組んだりすること

ができるような、複数の課題を準備する。グループ活動は、基本的に「ホームグループ」→「エキスパート活動」→「ジグソー活動」という3段階の過程を通る(図1)。

1) 統合すると1つの全体像を構成するような複数の課題を用意する

2) 受講者をホームグループ(例としてA班, B班, C班)に分ける〔ホームグループ〕

3) 各グループから1人~数名ずつ, 課題ごとに分かれて新たなグループを作る〔課題別グループ〕

4) 一定の学習時間を経て, 元のホームグループに戻り, それぞれの学習したことを教え合い, ジグソーパズルのように一つの全体像を構成する〔ジグソー活動〕

第1段階のホームグループで課題が提示され, メンバーはそれぞれの課題グループに分散して加わる。エキスパート活動のグループで課題に取り組み, 学習内容のインプットを終えたら, 第3段階として元のホームグループに戻る。そして, それぞれの課題の内容を, ほかのメンバーに伝達し合い, 最終的に課題

を統合する。それぞれのメンバーがエキスパートグループで学習してきた内容を発表する必要があるため, 協力やプレゼンテーション, コミュニケーション, 合意形成を取るといったことが必然的に起こることが期待できる。

#### (4) 一斉指導とジグソー法によるグループ活動の実践

##### ○実施時期と対象者

実施日 平成30年9月27日(木) 3講義目  
対象 教職を履修するH大学3年生 18人  
2つの授業方法でフォークダンスを実施した。はじめに一斉指導で「オクラホマミクスー」を実施し, 続いてグループ学習の一つであるジグソー法で「バージニア・リール」を実施した。実施後にアンケートを実施し, 5項目5段階で回答を得た。

##### ○指導方法

どちらのダンスも, 実技に先立ち, 歴史や国名, 日本で踊られるようになった経緯, マナーや態度として互いに相手が踊りやすいように配慮する, 目線を合わせることを共通理解させた。

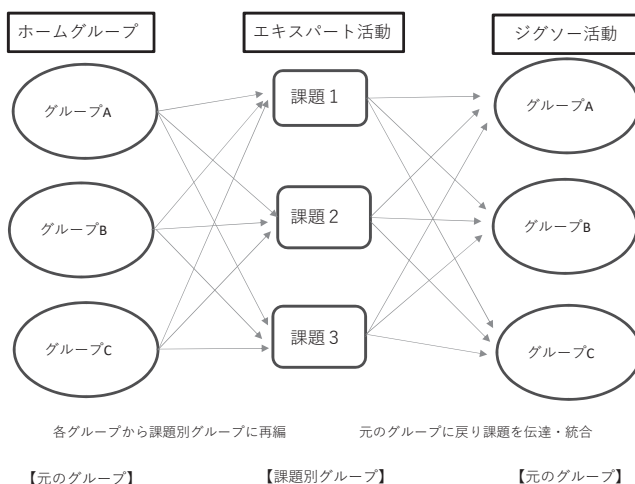


図1 ジグソー法によるフォークダンスのグループ学習

## 1) 一斉指導「オクラホマミクサー」

フォークダンスの基本用語を説明する。基本用語は、方向を示すLOD, 逆LOD, 回転方向であるCWとCCWを取り上げた。

- ①教師1名, 対面式でステップ(ステップ・クローズ, ウォーキング・ステップ, ヒール・タッチとトゥ・タッチ), 速さの違い(スローとクイック)を習得させる。
- ②2人組になり, リーダー役(男子パート)とパートナー役(女子パート)を決める。カップル・フォーメーション(バルソビアナ・ポジション)を習得させる。
- ③2組を前に出し, パートナーチェンジの時の動きを説明し, デモンストレーションする。
- ④課題1「LODに前進」全員でダブルサークルを作り, バルソビアナ・ポジションを取る。教師のカウントに合わせ, パートナーチェンジの前までのステップを復習する。ウォーキング・ステップの速さの違い(スロー)を確認する。
- ⑤課題2「ヒールとトーのタッチと女子の回り込みの移動」円周上でパートナーチェンジの動きを試す。特にリーダーがエスコートし, パートナーは相手のリードに合わせてCCWの回転方向で回り込むところを理解する。正確にできていないカップルには個別に指導する。
- ⑥カウントに合わせて全体の流れを復習する。ゆっくりのテンポから始め, 慣れたらテンポを上げる。
- ⑦曲に合わせて一曲通して踊る。

## 2) ジグソー法「バージニアリール」

バージニアリールは3部のフィギュアから

構成され, それぞれ独立した特徴的な形態を持つ。また各フィギュアの始まりと終りのフォーメーションが同じであるため, フィギュアをつなぐ際に混乱を避けられる。

- ①グルーピング: 本来は6カップル1セット12人で踊られる。参加者18人を3グループにわけ, 1グループ6人ずつとした。

- ②3つの課題別グループに再構成する。元のグループから各2名ずつ課題のグループに参加し, 解説書を元に課題のパートを習得する

課題1 コーラス(前進・後退, 回転, ドー・サー・ドー)

身につけたい技能: ドー・サー・ドー(ステップと踊り方)

難易度: 中程度

課題2 ダウン・ザ・センター, アップ・ザ・センターとリール

身につけたい技能: スライディング・ステップ, リール(ステップと踊り方)

難易度: スライディング・ステップは低い, リールは高程度

課題3 マーチとアーチくぐり

身につけたい技能: 移動の方向。動きと曲とのタイミングを合わせる

難易度: 低程度

指導方法は始めに全体で, フォークダンスの基本用語と技能, 解説書の読み方を理解する(教授型による一斉指導)。基本用語は, 回転方向(CW,CCW), フォーメーション(ロングウェールズ・フォーメーション, ヘッドカップルとフット・カップル)を取り上げる。グルーピング後に課題別グループに分かれ,



担当するパートの解説書を読み解き、踊れるようにする。

課題グループごとにホワイトボードに解説書の内容と図を掲示しておく。指導者は巡回し、特に難易度の高い技能が理解できているか確認し、必要があればテンポや方向等について修正し、滑らかに踊るためのポイントをアドバイスする。全ての生徒が踊り方を理解し、曲に合わせて踊れるようになれば元のグループに戻り、自分の課題のパートの踊り方を伝達する。各パートを統合し、音楽に合わせてグループ全員で踊れるようにする。6組がヘッド・カップルになり、リールを体験するまで繰り返して踊る。

課題は事前に時系列に沿い、特徴的な隊形で3パートに分け、設定しておく。各パートに含まれる難易度の高い技能（ステップや組み方、フォーメーションの変化など）は図を用意しておく。各パートの始まりと終わりのフォーメーションを図示しておく。技能の習得に映像を用いることは効率的である。今回はあえて、動きを言語化する、動きを時間軸だけでなく分節として認知する、文字から速度（スロー、クイック）を推測することを目的としたことから、映像を用いなかった。

### 3) 指導方法による比較

一斉指導による「オクラホマミクサー」とジグソー法によるグループ学習「バージニアリール」の実施後に、アンケートを実施した。自主性、話し合いが盛ん、協同、役割を果たす、楽しさ、技能の習得の6項目について、5段階で評価した。

一斉指導とジグソー法との指導法による比較を行った結果はともに高い値を示し、有意差は見られなかった（表3）。

## IV. まとめ

フォークダンスは、他のダンスと比較し単元に位置づけられる割合が低い傾向がみられる。体育祭等の発表など行事の一環として実施され、「伝承されてきた踊りの特徴を踏まえて踊る」内容や、主体的な学習形態が保証されていない傾向がある。フォークダンスは、明治時代に導入され、欧米偏重、技能習得に重きが置かれた。戦時中は外国の踊りが排除された。戦後は民主主義教育の目的とレクリエーションのブームと相まって盛んになった。しかし、今日まで系統的な学習計画の実践には至っていない。

社会情勢の変化は、フォークダンスの教材としての意義にも変容を求めている。

表3 ジグソー法によるグループ学習と一斉指導による学習の指導方法による比較 n=18

		自主性	話し合いが盛ん	協同	役割を果たす	楽しさ	技能の習得
一斉指導	平均値	4.67	4.67	4.67	4.61	4.78	4.56
オクラホマミクサー	S.D.	0.75	0.47	0.47	0.59	0.42	0.50
ジグソー法	平均値	4.67	4.78	4.89	4.78	4.78	4.67
バージニアリール	S.D.	0.75	0.42	0.31	0.53	0.42	0.47

## ①教材開発

- ・身近なアジアなどこれまで例示に含まれなかった地域を取り上げる。
- ・踊りの特性による分類と発達段階をふまえた技能段階表を作成する。
- ・生涯スポーツとして愛好したり，継続したりすることで健康の維持につながるデータを示す。
- ・地域活性化や地域アイデンティティの醸成，文化の伝承といった地方創生の観点を明確にする。

## ②主体的，共同的な学習方法の開発

- ・インターネットの活用と，踊りのデータベース化。
- ・ゲストティーチャーの活用や体験学習など地域資源との接続。単元で学習した内容を地域課題解決に活用する。

そして何より，踊るという律動的運動の持つ楽しさを享受し親和や承認といった社会的欲求を満たすことは，いつの時代においてもフォークダンスの根底にあった。フォークダンスは新たな学びの可能性を秘めているといえる。

## 参考文献

- 1) 高橋和子ら：平成26年度文部科学省委託事業 武道等指導推進事業（武道等の指導成果の検証）中学校における柔道・ダンスの指導状況等の調査，文部科学省，2015
- 2) 中村恭子，浦井孝夫：学習成果から見たダンスの教材特性の検討ー生徒の学習評価の観点からー，順天堂大学スポーツ健康科学研究 (11), 10-20, 2007-03
- 3) 白波瀬勇太：運動会・体育祭での発表を最終目標としないフォークダンスの授業実践，東京学芸大学 Repository,2018
- 4) 渡辺律子：学校体育におけるダンス教材についてーフォークダンス教材を事例としてー，文教大学教育学部紀要 (49), 169-176, 2015
- 5) 文部科学省：中学校学習指導要領解説，2017
- 6) 文部科学省：学校体育実技指導資料表現運動系及びダンス指導の手引き,2013
- 7) 中森しろう：日本の子供に日本の踊りを，大修館書店，1999
- 8) Vergheze J, Lipton RB, Katz MJ, Hall CB, Derby CA, Kuslansky G, Ambrose AF, Sliwinski M, Buschke H. Leisure activity and the risk of dementia in the elderly. N Eng J Med. 2003;348:2508-16.
- 9) (前掲) 文部科学省：学校体育実技指導資料表現運動系及びダンス指導の手引き,2013 p166
- 10) 栗田佳代子編著：インタラクティブ・ティーチングーアクティブ・ラーニングを促す授業づくりー，河合出版，2017

